

幼児のプライベート・スピーチと自由遊び中の目標指向性

藤岡 久美子

山形大学 教職・教育実践研究 第9号別刷

平成26年3月

幼児のプライベート・スピーチと自由遊び中の目標指向性

藤岡 久美子¹⁾

幼児期に自己に向けた発話（プライベート・スピーチ，PS）があらわれ，言葉の内化とともに内言へと移行することがヴィゴツキーの理論およびその後の研究において示されている。本研究の目的は，認知的課題に取り組む際に幼児が示す PS の個人差と幼稚園での自由遊び場面での目標指向性との関連を検討することである。21名の幼児が年少クラス在籍時および1年後に絵カード分類課題に取り組み，課題中の PS が測定された。年中時には自由遊び中の行動と注意が記録された。PS と行動・注意の関連を検討したところ，ぼうっとしていたりうろろろすることが多いほど，分類課題中の PS が少なかった。また，1年間で PS が増加した群においてのみ，製作やごっこ遊びなど静的な遊びを相手に注意を向けて取り組んでいるほど，課題中の文形態の PS が多く示された。これらの結果から，思考の道具である PS を認知的課題に取り組む際に多く示す幼児は，日常的にも目標指向的で，行動や注意が制御された状態を多く示すことが示唆された。

キーワード：幼児 プライベート・スピーチ 自由遊び 自己制御

問題と目的

子どもが行動を制御する能力は，幼児期に主要な発達を遂げる。6歳くらいまでにはさまざまな状況の中で適応できるだけの十分な行動や注意のコントロールのスキルを身につける（e.g., Eisenberg, Smith, & Spinrad, 2011）。これらの自己制御の発達において重要な役割を果たすのが言葉，特に自らに向けた言葉であることが指摘されている（ヴィゴツキー，2001）。

ヴィゴツキー（2001）によれば，言語はもともと他者とのコミュニケーション機能を持つ社会的な性質のものであり，それが機能的に分化して，行動調整機能やプランニング機能をもつ思考の道具としての内言が生じる。外言から内言への言葉の発達の過渡期の現象として，機能的に内言であるが，構造的にはまだ外言の特徴を持つ，自己に向けられた発話が現れる。ヴィゴツキーを受けて，ルリヤ（1969）は言葉の行動調整機能の実験を行い，のちの研究者によって自己制御機

能の研究へと発展した。一方，自己に向けられた発話の発達については，欧米では Kohlberg, Yaeger, & Hjertholm（1969）以降，プライベート・スピーチ（private speech, 以下 PS と略記）の用語で研究が多数行われた（Berk, 1992）。PS の研究方法としては，幼児や児童を対象に，実験室でパズルや分類課題，レゴ製作などの認知的課題に取り組んでいる際，あるいは教室での学習中や幼稚園での活動中のひとりごとを観察し，発話量や発話内容を課題の困難さや周囲の状況などの諸要因との関連で分析するものである（レビューとして，Berk, 1992; Winsler, 2009）。

それらの研究により，ヴィゴツキーが述べた PS 出現の発達曲線が示されている。すなわち，PS 発話量は，増加した後に減少する山型の軌跡を描く。ただし，ピークがいつ現れるかについては，子どもが取り組む課題の種類によって，幼児期（3～5歳）のこともあれば，7歳から9歳くらいにかけても増減が観察されることもあるなど，研究間で必ずしも一致していない

¹⁾ 山形大学大学院教育実践研究科

(Berk, 1992)。Winsler & Naglieri (2003)は、発話量ではなく、5～17歳の約2000名を対象にプランニング課題（認知機能検査の下位尺度）中にPSが示される者の割合を報告している。外言と同程度の音量によるPSを示す者の割合は、5歳の43%から17歳の10%まで直線的に減少した。一方、ささやき声のPSは5歳の13%から9歳の28%をピークに10代で11%前後に減少する山型の増減を示した。

難しい課題に取り組んでいる際にPSが出ることは、児童期以降も継続することは間違いない。大人でも同様の場合にひとりごとが現れる（e.g., Duncan, & Cheyne, 2001）。このことは、内言が形成されてからも、PSが思考の道具としての機能を果たすことを示唆している。しかし、内言への過渡期の現象としてのPSは、以下の研究知見からも、ヴィゴツキーが述べているとおり幼児期に特有なものであると考えられる。

Winsler, Carlton, & Barry (2000)は、3歳および4歳児を幼稚園で自然観察し、子どもがどのような活動に取り組んでいるときに、またどのような状況でPSが出現するかを検討した。その結果、3歳と比較して4歳のPSは、取り組んでいる活動との関連でより体系的に使用されることを示した。また、実行機能課題を行っている時に、3歳代の幼児に比べて4、5歳代の幼児において自発的なラベリングが多く見られ、それらはよりよい課題遂行を導いていたという研究結果もある（Müller, Zelazo, Hood, Leone, & Rohrer, 2004）。このように、幼児期の子どもが目標指向的な認知的制御を行う際、自ずと自分に向けた言葉がそのプロセスに関与すること、そしてそのような傾向は4歳頃から顕著になってくることの証左は多い。

ところで、PSの出現には個人差が大きいことが指摘されているが（Berk, 1992）、言葉による思考の芽生えの早期である幼児期に、自己に向けられた言葉の使用の個人差と、日常的な行動や注意の制御との関連を検討した研究は限られている。上述のように自分に向けた言葉が目標指向的な自己制御のプロセスに関与するならば、内言への過渡期の現象としてのPSを認知的課題に取り組む際に多く示す幼児は、幼稚園での自由遊びにおいて目標指向的で、行動や注意が制御された状態を多く示すと考えられる。

この点に関する数少ない研究として、Winsler, DeLeon, Wallace, Carlton, & Willson-Quayle (2003)は、3歳児クラスと4歳児クラスに在籍する幼児を対

象に、実験室で課題に取り組んでいる際のPSの観察を6ヶ月間隔を空けて2回行った。幼稚園の活動中の目標指向性の観察と、教師と親による社会性の評定も行い、PSとの関連を検討した。その結果、ささやき声など部分的に内化したPSを多く示す幼児は、問題行動が少なく社会的スキルが高いと評定された。また、課題に関連しない内容のPSが多かった幼児は、目標指向的行動が少なく、社会的スキルが乏しいと評定された。

本研究においても、自己に向けられた言葉の使用の個人差と、日常的な行動や注意の制御との関連を検討することを目的とする。以下に方法上の留意点を述べる。

自己に向けられた発話は、その発達上の性質故に量的な変動が大きい。前述のWinsler et al. (2003)では、ささやき声のPSは、6ヶ月前後の観察間での相関が示されなかった。すなわち、半年前はPSが少なかった幼児が多くPSを示すようになっていたり、反対に多くのPSを示していた幼児が発話しなくなるなど半年の間での変動が大きいことを示唆している²⁾。

このような4歳代でPS発話量の変動が大きいことは、この年齢の幼児を対象にPSを測定した場合に、課題中のPSがないこと、つまり幼児が“無言”であることの解釈を困難にする。すなわち、PSの山型の発達曲線のまだ左側（言葉による思考の増加によりPSが増加）に位置する幼児においては、課題中に“無言”であることは、課題への取り組みが言語的思考によりなされていないことを暗示する。ところが、山型の曲線のすでに右側（内言への移行による音声の消失）に位置する幼児の場合は、“無言”であることが必ずしも言語的思考のなさを意味しない。4歳児クラス在籍の幼児では、両者が混在することによって、自己制御的な言葉の使用の指標としてのPS発話量と他の変数の相関を検討しようとする際に、明確な関連が得られない可能性が考えられる。

そこで、本研究では、年少（3歳児）クラス在籍時と年中（4歳児）クラス在籍時の2時点でPSの測定を行い、1回目から2回目へとPSが減少傾向にある幼児と増加傾向にある幼児とを区別して、PSと日常的な行動

²⁾ この研究では、外言と同程度の音量のPSについては、2回の測定時期の間で有意な正の相関が示されている。すなわち、人と話すような声でひとりごとを多く発する子どもは、半年後も相対的に多く発している。このような音量が低下していないPSは、年長のADHD児に顕著に見られる（Berk & Potts, 1991）。

や注意の制御との関連を検討する。

また、PS のコーディングについては、多くの先行研究に共通して、Berk (1986) の用いた 3 カテゴリー（外言と同じ程度の音量の PS で課題に関連する内容か否かの 2 カテゴリー、およびささやき声や聞き取れない程度のつぶやきと発話様の唇の動き）が用いられている（e.g., Winsler et al., 2003; Fernyhough, & Fradley, 2005）。しかし、ヴィゴツキー（2001）によれば、外言から内言へと変化する過渡期に生じるのは、音量の消失だけではなく、文章から単語が徐々に省略されること、単語からそれを構成する音節が抜け落ちることなどの構造面の変化もある。藤岡（2001）は、文、単文節、断片と PS を形態によって分類し、困難さが異なる 2 種類の課題における年中児の PS を比較したところ、課題が困難な時に特に文形態の PS が増加することを見いだしたが、PS の構造面を検討した研究は少ない。そこで、本研究においても、藤岡（2001）と同様に形態次元での PS のコーディングを行う。

幼児の日常的な行動や注意の制御の観察については、Winsler et al. (2003) と同様に、幼稚園での自由遊びの観察を目標指向的な遊びをしているか否かという観点で行う。Winsler et al. (2003) では、10 秒単位のタイムサンプリングにより目標指向的遊びか否か、注意が持続しているかどうかをコーディングしている。本研究では、目標指向的遊びを“静的遊び”と“動的遊び”に分類して検討する。また、注意の制御に関連して、取り組んでいる遊び・活動に関連する対象に注意を向けているのか、関連しない対象に注意を向けている（よそ見している）のかを記録することとする。

以上の手続きにより、認知課題中に自分に向けた言葉を多く発する幼児ほど、自由遊び中に特定の遊びに取り組み注意がそれないなど目標指向的な様子を多く示す、という予測を検討する。

方法

対象児および方法の概要

幼稚園年少（3 歳児）クラスに在籍する幼児 21 名（男 10 名、女 11 名）を対象に 1 回目の調査を行い、13 ヶ月後の年中クラス在籍時に 2 回目の調査を行った。1 回目の調査時点での対象児の年齢は 3.67～4.50 歳（平均 4.14, SD .21）であった。2 回目は（4.75～5.58 歳、平均 5.21 歳, SD .21）。1 回目の調査では、絵カード分類課題を行い、2 回目の調査では、絵カード分類課

題および自由遊びの行動観察を行った。絵カード分類課題は 2 回ともまったく同じ手続きで行った。

行動観察

各対象児につき、自由遊び場面の観察を 9 時から 11 時までの 30 分ごとの 4 つの時間帯に 1 回ずつ、異なる日に行った。以下に述べる手続きで、各回合計 10 分の観察を行った。

観察は事前に十分に訓練を受けた 5 名の観察者が分担して行った。観察者は、リストにしたがって対象児を見つけ、しばらく全体の状況を把握してから、観察を開始した。10 秒単位のタイムサンプリングによって、活動内容と注意の対象を記録した。観察は 6 単位（1 分間）連続で行い、終了後に、活動内容の詳細（一緒に遊んでいる相手の名前、遊びの詳細など）を記入した。

活動内容と注意の対象について以下のカテゴリーで記録した。活動内容は、製作遊び、ごっこ遊び、会話などの“静的遊び”、サッカーや鬼ごっこなどの“動的遊び”、特に何かをするわけではなくうろろうしたりぼーっとしているなどの“漫然”の 3 種類であった。注意の対象は、静的遊びについては活動に関連した物／人、関連しない物／人の 4 種類で記録した。動的遊びについては注意の対象が空間全体であるなど物か人かの区別が困難であるため、活動に関連しているか否かの 2 種類で記録した。漫然については、注意の対象が物か人かを区別した。たとえば、子どもが製作遊びに取り組みながら自分の制作物や一緒に行っている他児の制作物あるいは道具などに注意を向けている場合は、活動内容が“静的遊び”で、注意の対象が“関連・物”とコーディングされた。また、サッカー遊びに参加しながら砂場の方によそ見をしているときは、“動的遊び”で注意の対象は“非関連”となる。“漫然”のコーディングの例として、座って遠くを見ていたり、何かをするわけではなく積み木をもてあそぶなどしている場合は、“漫然”で注意の対象が“物”となる。また、他児の遊びを傍観している場合は、注意の対象が“人”となる。

絵カード分類課題

手続き 幼稚園内の個室で 1 名ずつ行った。

材料 24 枚の絵カードを 4 つのカテゴリーに分類する課題を 2 種類作成した。別に練習試行用の 12 枚を作成した。課題 A：「生き物」「食べ物」「着る物」「遊具」。課題 B：「生き物」「生き物の巣」「食べ

物」「食器」。

練習試行 課題の手続きを理解させるため、はじめに実験者が練習用課題の分類を行った。その際、いったん配置したカードを訂正してもよいことを理解させるため、訂正する場面を見せた。続いて、対象児に別のカードセットで練習課題を行わせた。

本試行 対象児の机の上には、4領域に区切られ6個分のカードサイズの枠が描かれたカード配置用の台紙が置かれた。絵カードは一定の順番でカード箱に入れられた。絵カードは上から順番に1枚ずつとること、すべてのカードを台紙の上に分類すること、小さな声でなら話しながらいって行くこともよいことが教示された。実験者は、一度退室するので戻ってくるまで課題に取り組み続けるように告げて退室し、対象児は一人で課題を行った。5分後、再び実験者は入室し、課題が終了していない場合は延長を認めた。課題A終了後、課題Bを同様の手続きで行った。いずれの幼児も課題A、Bの順に行った。課題中の子どもの様子はビデオカメラで録画され、発話は対象児の襟元につけた小型マイクを通してテープレコーダーによっても録音された。

発話のコーディング 課題従事中の発話は全て書き起こされ、明らかに課題に関連しない発話を除いて、表1に示すように形態次元で文、単文節(単語+助詞)、断片(音節、聞き取れないつぶやき、発話様の唇の動き)の3カテゴリーに分類された。5分以内にすべてのカードの配置をし、その後修正を行わなかった場合は、最後のカードを配置した時点を課題終了時点として所要時間を求め、1分あたりの発話量を算出した。なお、最終カード配置以前に示された課題に関連しない発話は、物音への反応(「なんだ?」)など少数しか示されなかったため、分析からは除外した。また、PSの音量については、終始大きな声で話している幼児はいなく、発話の多い幼児の中に、時々会話するのと同程度の音量のPSを示す者もいたが、音量レベルについての分類は行わなかった。

表1 プライベート・スピーチの形態次元の分類カテゴリー

形態	定義	例
文	複数の文節からなる	なににやろうかな これはこれじゃないよね 生き物だよこれは
単文節*	独立して文節のみがある	パンどうしよう、パン ケーキ
断片	音節、不明瞭なつぶやき、発話様の唇の動き	こっxx うあ

※同じ単語の間のない繰り返しの場合も1カウントとする(例:「ちがうちがう」「これこれ」など)

結果

各変数の記述統計

行動観察とPSの各指標の記述統計を表2に示した。

PS縦断変化の群分け

対象児のうち2回分のPSデータに欠損がない19名について、1年目から2年目へのPS量が増加した群と減少した群に分類した。増加群は9名、減少群は8名であった。差が1未満の2名は分析から除外した。

両群の各PSの平均および標準偏差は表3に示した。群の平均の差をt検定によって検討したところ、年中時の文形態PSを除いて、減少群と増加群の間に有意あるいは有意傾向の差が示され、減少群は年少時のPSが全体として増加群より多く、増加群は年中時のPSが減少群より多かった。

表2 各変数の記述統計

変数	平均値	標準偏差
年少時 PS 文形態	1.33	2.00
単文節	2.16	2.66
断片	2.61	1.40
総量	6.10	5.11
年中時 PS 文形態	2.14	5.97
単文節	2.17	2.95
断片	3.34	3.20
総量	7.65	8.16
静的遊び・関連物	73.94	26.38
静的遊び・関連人	62.62	22.73
静的遊び・非関連物	0.94	1.19
静的遊び・非関連人	6.70	5.90
動的遊び・関連	31.29	27.50
動的遊び・非関連	1.06	1.73
漫然・物	10.31	10.20
漫然・人	12.28	11.12

表3 PS変化群ごとの各発話カテゴリーの平均と標準偏差(SD)

PS変化群	PS変化群	年少時		年中時	
		平均	(SD)	平均	(SD)
文形態	減少	2.60	(2.59)	0.19	(0.39)
	増加	0.46	(0.61)	3.76	(8.68)
	t値	2.42 *		-1.16	
単文節	減少	4.19	(3.01)	0.50	(0.95)
	増加	0.51	(0.59)	3.36	(3.07)
	t値	3.61 **		-2.52 *	
断片	減少	3.16	(1.12)	1.60	(1.98)
	増加	1.95	(1.28)	5.25	(3.57)
	t値	2.06 +		-2.55 *	
総量	減少	9.96	(5.56)	2.30	(3.09)
	増加	2.92	(1.63)	12.37	(8.07)
	t値	3.64 **		-3.31 **	

注: + p < .10, * p < .05, ** p < .01

表4 PSと行動変数との順位相関

		プライベートスピーチ			総量
		文形態	単文節	断片	
静的遊び・関連物	全体	.35	.37 +	.10	.18
	増加群	.44	.65 +	-.12	.38
	減少群	.05	-.10	.12	.04
静的遊び・関連人	全体	.40 +	.25	-.04	.26
	増加群	.73 *	.45	-.42	.53
	減少群	-.26	.18	-.05	-.07
静的遊び・非関連物	全体	-.05	-.19	-.36	-.19
	増加群	.23	-.16	-.58	-.21
	減少群	-.54	-.53	-.18	-.26
静的遊び・非関連人	全体	.12	.10	.14	.14
	増加群	.04	-.10	-.42	-.43
	減少群	-.40	-.29	.00	-.17
動的遊び・関連	全体	-.31	-.28	-.07	-.08
	増加群	-.56	-.66 +	.41	-.19
	減少群	-.19	-.37	-.53	-.47
動的遊び・非関連	全体	-.42 +	-.14	.21	-.02
	増加群	-.72 *	-.55	.44	-.46
	減少群	-.44	-.42	.11	.00
漫然・物	全体	-.57 *	-.37 +	-.23	-.47 *
	増加群	-.46	-.13	.05	-.42
	減少群	-.22	-.06	-.02	.20
漫然・人	全体	-.15	-.17	-.13	-.32
	増加群	-.47	-.14	.08	-.47
	減少群	.51	-.01	.04	.19

注. + $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

PS と行動変数との順位相関

全体および PS 増加群、減少群ごとに、行動変数と PS 変数の Spearman の順位相関を算出した。表 4 に示されるように、全体では、文形態 PS および PS 総量と“漫然・物”に有意な負の順位相関が示され、自由遊び中に特定の遊びに取り組みず、うろろうしたりぼーっとものを見ているなどの姿を示しているほど、PS 全体が少なく、とりわけ文形態の PS が少なかった。

増加群において、文形態の PS と“静的遊び・関連人”との間に有意な正の、“動的遊び・非関連”との間に有意な負の順位相関が示された。すなわち、分類課題で文形態で自分に向けた言葉を多く発する子どもほど、自由遊びにおいて、製作等の遊びに従事しながら一緒に遊んでいる相手に注意を向けている状態を多く示し、また、身体を使った運動的な遊びをしながらよそ見をしているような状態が少なかった。また、有意傾向にとどまるが、単文節 PS は“静的遊び・関連物”との間に正の、“動的遊び・関連”との間に負の相関を示した。

減少群においては PS と行動変数の有意な相関は示されなかった。

考察

年少時から年中時にかけての分類課題中の PS の変化については、増加した者と減少した者が約半数ずつであった。先行研究と同様に、3 から 5 歳の幼児期に PS が増減を示すこと、特に 4 歳代でそれが顕著であることが本研究の結果からも示唆される。

本研究の目的である絵カード分類課題に取り組んでいる際の PS と自由遊びで観察される行動や注意の特徴の関連については、いくつか興味深い結果が示された。まず、対象児全体で、“漫然”として“物に注意”を向けている状態と PS 発話量の間に負の相関が見いだされた。すなわち、幼稚園の自由遊びの時間に、遊びを見つけないことができず、うろろうしたりぼーっとしたりしていることが多い幼児は、認知的課題の取り組みにおいて自己に向けた発話を示すことが少ない。ヴィゴツキーの理論や先行研究の結果から示唆されるように、自分に向けた言葉が目標指向的な自己制御のプロセスに関与するのであれば、内言への過渡期の現象としての PS を認知的課題に取り組む際に多く示す幼児は、幼稚園での自由遊びにおいて目標指向的で、行動や注意が制御された状態を多く示すだろうと本研究では予測した。上述の結果は、この予測を支持するものである。

一方で、同じく“漫然”とした様子でありながら、注意の対象が“人”である場合については、PS との関連は示されなかった。“漫然・人”の典型的な姿は、他児の遊びの傍観であった。幼児の引込み思案の研究において、静的ひとり遊びや動的ひとり遊びは、年齢によっては高い認知コンピテンスと関連するなどポジティブな側面があるが、本研究の“漫然”のように、うろろうしたり他児の遊びを傍観する行動は、幼児期に一貫して不安や内気さ、低いコンピテンス、仲間からの受容感の低さ等と関連していた (Coplan, Rubin, Fox, Calkins, & Stewart, 1994; Nelson, Rubin, & Fox, 2005)。このことから、本研究で観察された他児の遊びを傍観して何もせずにいる様子は、目標指向性の次元とは別に、内気さなどの情緒的特性を背景とした姿であると考えられる。

1 年前よりも分類課題中の PS が増加している幼児では、構造的に省略されていない文形態の PS を多く示すほど、製作やごっこ遊び等の静的な遊びを遊び相手に注意を向けながら行っていることが多かった。また、動的遊び中に非関連のものに注意を向けることが少ないという関連が示された。これらの行動変数との相関は、PS 総量についてはみられず、文形態のみであった。対照的に、単文節 PS と“静的遊び・関連物”の間に正の、“動的遊び・関連”の間に負の相関も有意傾向ではあるが示された。このような、文形態 PS と単文節 PS で異なる行動変数に対して関連が示されたことは、ど

のように解釈できるだろうか。

PSの形態として、文と単文節の区別は、ヴィゴツキーの理論に基づいて、省略が進んでいるか否かという内化のレベルが異なるものとして設定したが、内化の進んだPSが製作遊び等に取り組んでいるときに物に注意を向けることと、内化の進んでいないPSが人に注意を向けることと関連すると解釈するより、異なる観点で文形態のPSと単文節のPSを捉えた方がよいと思われる。たとえば、PSが文か単文節かという形態の違いは、外言、すなわち他者とのコミュニケーションの言葉のあり方を反映しているという解釈が可能である。

藤岡(2014)では、生き物絵カードを年長児が三人で一緒に分類している時のやりとり事例が示されている。そこでは、「これ」と一言だけ言ってカードを配置する幼児や、対照的に「カラスも飛ぶから、こっちだよ」など文形態の発話を示す幼児もいる。他者とのコミュニケーションにおいて、省略した表現を用いる幼児は、自己に向けた発話もまた、もともと省略した発話スタイルなのかもしれない。反対に、他者とのコミュニケーションにおいて言葉が豊富で対話的な幼児は、自己に向けた発話も同様の形態を取るだろう。このように、PSにおける文形態か単文節かという差異を、コミュニケーションの発話のスタイルの反映だと解釈すると、本研究で文形態PSを多く示した幼児は、対話的であるが故に一緒に遊ぶ相手に注意を向けることが多かったと推測できる。

PSと他者とのコミュニケーションの関係については、PSが外言から分化し発達するというヴィゴツキーの仮説を検討するために、養育者との相互作用スタイルと子どものPSの関連が研究されてきた(e.g., Behrend, Rosengren, & Perlmutter, 1992; Winsler, Diaz, McCarthy, Atencio, & Adams Chabay, 1999)。しかし、仲間との相互作用とPSの関連については検討されていない。これを検討することは、子どもが仲間とのやりとりから、個の思考へと何をどのように取り入れるのかといった教育的に重要な課題へのアプローチにもなり、研究の意義があると考えられる。

文献

Behrend, D. A., Rosengren, K. S. & Perlmutter, M. (1989). A new look at children's private speech: the effects of age, task difficulty, and parent

presence. *International Journal of Behavioral Development*, 12, 305-320.

Berk, L. (1986). Relationship of elementary school children's private speech to behavioral accompaniment to task, attention, and task performance. *Developmental Psychology*, 22, 671-80.

Berk, L. E. (1992). Children's private speech: An overview of theory and the status of research. In R. M. Diaz, & L. E. Berk(Eds.), *Private speech: From social interaction to self-regulation*. Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.17-53.

Berk, L. E., & Potts, M. (1991). Development and functional significance of private speech among attention-deficit hyperactivity disorder and normal boys. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 19, 357-377.

Coplan, R. J., Rubin, K. H., Fox, N. A., Calkins, S. D., & Stewart, S. L. (1994). Being alone, playing alone, and acting alone: distinguishing among reticence and passive and active solitude in young children. *Child Development*, 65, 129-137.

Duncan, R. M., & Cheyne, J. A. (2001). Private speech in young adults: Task difficulty, self-regulation, and psychological predication. *Cognitive Development*, 16, 889-906.

Eisenberg, N., Smith, C. L., & Spinrad, T. L. (2011). Effortful control: Relations with emotion regulation, adjustment, and socialization in childhood. In K. D. Vohs & R. F. Baumeister (Eds.), *Handbook of self-regulation: Research, theory, and applications (2nd ed.)*. New York: Guilford Press.

Fernyhough, C., & Fradley, E. (2005). Private speech on an executive task: Relations with task difficulty and task performance. *Cognitive Development*, 20, 103-120.

藤岡久美子 (2001). 幼児のprivate speech一年中児における発話形態の特徴—日本教育心理学会第43回総会(愛知教育大学)発表論文集, 635.

- 藤岡久美子 (2014). 幼児の協同的問題解決は個の思考にどのように取り入れられるか 山形大学大学院教育実践研究科年報, 5, 4-13.
- Kohlberg, L., Yaeger, J. & Hjertholm, E. (1969). Private speech: Four studies and a review of theories. *Child Development*, 39, 691-736.
- ルリヤ, A. R. 松野豊・関口昇 (訳) (1969). 言語と精神発達 明治図書出版
- Müller, U., Zelazo, P. D., Hood, S., Leone, T., & Rohrer, L. (2004). Interference control in a new rule use task: age-related changes, labeling, and attention. *Child Development*, 75, 1594-1609.
- Nelson, L. J., Rubin, K. H., & Fox, N. A. (2005). Social withdrawal, observed peer acceptance, and the development of self-perceptions in children ages 4 to 7 years. *Early Childhood Research Quarterly*, 20, 185-200.
- ヴィゴツキー L. S. 柴田義松 (訳) (2001). 新訳版・思考と言語 新読書社
- Winsler, A. (2009). Still talking to ourselves after all these years: A review of current research on private speech. In A. Winsler, C. Fernyhough, & I. Montero(Eds.), *Private speech, executive functioning, and the development of verbal self-regulation*. Cambridge University Press.
- Winsler, A., Carlton, M. P., & Barry, M. J. (2000). Age-related changes in preschool children's systematic use of private speech in a natural setting. *Journal of Child Language*, 27, 665-687.
- Winsler, A., De León, J. R., Wallace, B., Carlton, M. P., & Willson-Quayle, A. (2003). Private speech in preschool children: Developmental stability and change, across-task consistency, and relations with classroom behavior. *Journal of Child Language*, 30, 583-608.
- Winsler, A., Diaz, R. M., McCarthy, E. M., Atencio, D., & Adams Chabay, L. (1999). Mother-child interaction, private speech, and task performance in preschool children with behavior problems. *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, 40, 891-904.
- Winsler, A., & Naglieri, J. A. (2003). Overt and covert verbal problem-solving strategies: Developmental trends in use, awareness, and relations with task performance in children age 5 to 17. *Child Development*, 74, 659-678.